

前回は、自閉症支援の現場で〈多くの人が根拠もなく絶対的事実であると信じている事象〉を神話と称して、身近な缶コーヒーの飲用について、二事例を紹介しました。実はそんな神話は、現場にはいくつも転がっているのですが、すでに誤って固定化しているが故に、常識として堂々と通用していて、誰もそれを疑おうとしません。支援者が信じている常識は、不幸なことに、当事者の方にとっても常識になり、その殻をお互いに抜け出せないまま、共にいばらの道を歯を食いしばって進んでいかななくてはならないというようなことが起こります。

今回は、そんな神話について考えていきたいと思います。

### 【神話その3】

K男さんが毎回朝食に出るチーズに苦戦している。いつも食べるのは一番最後、しかも「さあ、これから食べるぞ」と決心したかのような丸飲みである。彼はもう20代後半だが、おそらく20年以上の間、このようにしてチーズを食べて来たのだろう。悲しいことに、発語のある彼であるが、際立って「食べたくない」というような発信は無い。

しかし、ここで考えてみて下さい。現代の日本で、20代後半というような年齢で、偏食の矯正しようとして、嫌いなものを丸飲みしてまで、毎日食べ続けている人が何人いるかということについて。（たぶん、ほとんどいない…？）

支援者は、彼のチーズ丸飲みの姿を見て、「頑張ったね」と肯定的な評価を伝えます。本人も「頑張ったね」と肯定的に自己評価をします。もうおわかりだと思いますが、実はこの二人を縛っているのは、〈偏食をする子は悪い子、偏食が無い子は良い子〉という神話なのです。

世間的には、偏食（誰にでも嫌いな食べ物がある）は万人の常識です。嫌いな食べ物は、皆さん器に残したり、避けて通ったりしているのです。

ところが、自閉症支援現場では、成人期になっても、〈偏食をする子は悪い子、偏食が無い子は良い子〉というこの神話が堂々とまかり通ります。ローカルルールにもかかわらず、常識化しているのです。

世間的な常識を背景にして考えれば、チーズ丸飲みをしているK男さんにかかる言葉は、「頑張ったね」ではなくて、「無理して食べなくてもいいんだよ」であるはずであるし、それに応えるK男さんも「チーズ、本当は嫌い」であるはずです。

その後、支援者は彼に「無理して食べなくてもいいんだよ」と伝えましたが、20年以上偏食悪い子神話にどっぷり漬かっていたK男さんは、自分でその殻を打ち破ることができず、チーズを相変わらず、丸飲みし続けました。

その殻を破ったのは、母親の一言でした。「チーズを食べることができるようにと、ずっと頑張ってきたんだよね。もう頑張らなくてもいいんだよ。ずっと頑張ってきたんだから。お母さんだって嫌いなものは残しているよ。誰でもどうしても食べたくない、嫌いなものがあるんだよ」と。

この言葉の後、彼は、安心してチーズを残すことができるようになりました。

支援者も、家族も、本人も、知らないうちに神話にがんじがらめになり、その中で自分の首を自分で絞める結果になっていたのです。せっかくの心的エネルギーを、こんな神話を守るために使っていたのでは、本当の幸福にたどりつけないのは明白です。